カトリック教報

カトリック長崎大司教区
広報委員会
〒852-8113
長崎市上野町10-34
カトリックセンター内
TEL 095-843-3869
FAX 095-843-3417
振替口座 01880-5-2699
発行人
山田良秋
印刷所
株式会社 インテックス

平和のための祈りお願い

中村倫明大司教は10月7日ロザリオの聖母の記念日に、10月のロザリオをウクライナとロシアのため、また全世界の平和のためにささげるよう呼び掛けました。引き続きお祈りいたしましょう。

浦上教会の「被爆十字架」返還を受けて

被爆77年、答礼と平和交流の旅へ

浦上教会主任　久志 利津男

かつて浦上教会の祭壇にあり、原爆投下後、がれきの中から発見されたという「被爆十字架」。慣例として、頂いたその感謝のしるしに「答礼巡礼」という教会の良き伝統に倣い、9月末から10月初めに、浦上教会代表らが米国のシカゴを中心に平和交流の旅に出かけた。最大の目的は、十字架をアメリカに持ち帰り大切に保存した米海兵隊員フック氏の家族との対面、そして1982年から十字架を保存・展示し、2019年8月に浦上教会に返還したウィルミントン大学平和資料センターへの答礼。その時期をうかがっていた中、今回の実現となった。答礼団の「被爆十字架」の複製（レプリカ）贈呈をはじめ、さまざまな箇所で行われた平和交流の6日間をまとめて見る。

返還を受けて

1945年被爆後に、崩壊した旧浦上天主堂のがれきの中で見つかった十字架を、米進駐軍のウォルター・フック氏が当時の山口愛次郎司教より譲り受けて米国に持ち帰った。その後、オハイオ州ウィルミントン大学平和資料センターに寄贈され保管展示されていたが、同大学側から返還の意向を受け、2019年8月7日、浦上教会で返還式が行われた。9日の平和祈願ミサで被爆マリアとともに奉納され、現在、小聖堂に安置されている。

当初、高見三明大司教（当時）と浦上教会の私久志主任司祭は同大学に感謝の意を表すため、十字架の複製を贈呈することを計画。すぐの実現は叶わなかったが、今年の被爆77年に合わせて答礼の運びとなった。

スーピッチ枢機卿を表敬訪問した巡礼団（10月1日シカゴ）。左から、宮崎広和さん、平野布佐子さん、髙見大司教、スーピッチ枢機卿、久志神父、山田一俊さん、平野勝一さん、西村勇二さん。

高見大司教ら巡礼者

この巡礼には、高見名誉大司教を団長に、私と、信徒を代表して山田一俊さん、平野勝一さん、平野布佐子さん、西村勇二さん、西村勇二さん、合わせて6人が参加。

西村さんは十字架複製の製作代表者。事の発端は返還翌年の2020年6月、私が被爆マリア像の複製製作者で葬儀社会長の西村勇夫さん（今年7月21日逝去）に複製贈呈について相談したこと。快諾を得て、同年8月9日の平和祈願祭で奉納され、贈呈の日を待っていた。

主な日程と内容

■9月27日　シカゴ到着の翌日、正義や平和の問題に深く関わっている市内の聖ベネディクト女子修道会でミサ。同会のシスターの一人が現地のカトリックセンターで働いている関係から招待の形で実現。司式した私は説教の中で、被爆者で早くに亡くなった母の晩年の姿を振り返り、自分が被爆2世であることから果たすべき使命について話を進めた。約30人の修道女たちの、静かなそして真剣な眼差しの顔が印象的であった。

■9月28日　核兵器廃絶条約を支持する決議（今年7月19日採決）をシカゴ市議会に提出したマリア・ハデン議員と会合。議員は私たち答礼者が語る原爆や平和についてうなずいて聞いた。自身の平和活動や生活に直結する環境問題にも触れた議員の熱弁は、平和への思いが本物であることを証明した。

夕方、ノースウェスタン大学カトリックセンター（所長ザモラ神父）では、同大学の学生、スタッフ、教員、信徒ら約80人との交流会が行われ、巡礼者一人ひとりの言葉にしっかりと聞き入っていた様子から、被爆地の生の声を初めて聞いたように感じた。

贈呈式が行われた30日の式（後述）前のウィルミントン大学での交流会も同様の反応で、若い学生とのこのような関わりは世界の将来を担う彼らに大きな影響を与えたに違いない。

■9月29日　被爆十字架をアメリカに持ち帰ったフック氏の家族らと昼食を兼ねた交流のため、シカゴからニューヨークへ。この貴重な十字架の中心人物となるフック氏の長男クリス・フックさん、長女ミーガン・トゥーリスさん（次女のメアリー・ジーン・ガーケンさんとは贈呈式で）との対面は今回の答礼の目的でもあった。

場所は彼らの友人宅で、まずはフック氏を追悼するミサがささげられた。その中で髙見大司教は「（フック氏は）彼にしかなし得なかった特別な使命を神様から与えられた」と、しのぶ言葉で感謝の意を表明した。

写真提供　宮崎広和さん
フック氏のご家族・友人と巡礼団。被爆十字架（複製）を手にしている中央の人物は長男のクリス・フックさん。

長い年月と遠い異国の地で、このような出会いがあることを認識する大切な時間を過ごした。

■9月30日　今回の目的「被爆十字架」の贈呈式はウィルミントン大学近くのマフィー・シアター（劇場）で行われた。同大学ベイツ学長、パターソン副学長、浦上教会での返還に来られた平和資料センターのマウス所長とマコーミック牧師、そしてフック氏の次女、他地元の方々も参列。

大学を代表しベイツ学長が歓迎のあいさつ、巡礼団の髙見大司教が心からの謝辞を述べた。通訳は、返還式や今回の贈呈式まで直接に関わってくださった宮崎広和さん。続いて私は「あってはならない出来事の中で、この現実を見つめつつ、ここにある被爆十字架が思いを一つにし、このような出会いがあること、まさに計らい」と話し、十字架の複製製作に携わった西村さんは「90年近くいろいろな思いの詰まった十字架を再現するのには感慨深いものがありましたが、私たちなりに原爆で亡くなった方々の永遠の安息と、アメリカと日本がいつまでも仲良く平和でありますようにと願いながら、この十字架に思いを込めました」とその胸の内を英語で語った。

いよいよ贈呈式。被爆十字架は、長崎から米国、米国から長崎、そして複製の形で米国へ、その受け渡しが髙見大司教からマウス所長へなされた。十字架を介して平和の橋渡しの瞬間でもあった。

㊨髙見大司教からマウス所長へ、被爆十字架（複製）の贈呈。後ろは製作代表者の西村さん。
㊧巡礼団歓迎の言葉を掲げたマフィー・シアター。　〔写真提供　ウィルミントン大学〕

この式にはマスコミも出席し、今回の答礼の注目度を垣間見ることができた。

■10月1日　ウィルミントンからシカゴに戻り、フランシスコ教皇と核兵器廃絶で思いを一つにするシカゴ大司教ブレーズ・スーピッチ枢機卿を表敬訪問。髙見大司教の自身と家族の被爆体験、そして長崎の核兵器廃絶への思いに聞き入っていた枢機卿に「長崎へ」と招待し、「ぜひ、実現したい」と笑顔で応えられ、永井隆著『長崎の鐘』（英語版）を記念に差し上げた。

中村大司教と長崎市長からの親書

長崎教区を代表して中村倫明大司教は、答礼歓迎への感謝と互いの平和促進連帯を願って、ノースウェスタン大学カトリックセンター所長、ウィルミントン大学学長と同大学平和資料センター所長に親書を送った。また、田上富久長崎市長からは、マリア・ハデン議員とウィルミントン大学学長宛てに貴重な言葉が添えられた親書を預かり、無事に届けた。

振り返って

数も民族もそして考えも桁が違う広大な国アメリカの地を初めて訪問、私たち答礼者の言動は大海の一滴に過ぎないとさえ思いながら。しかし、現実は異なっていた。10月2日、最後の訪問先聖ニコラス教会で一人の女性が私に語り掛けてきた。「ミサの中で主の祈りを唱えた時、『わたしたちの罪をおゆるしください。私たちも人をゆるします』というところで深く心を揺さぶられた」と言われた。「五つのパンと二匹の魚」の奇跡の話を彷彿させる。

本当に行って良かったと心底から思っている。

バチカンの発表

9月26日、教皇フランシスコは高松教区の使徒ヨハネ諏訪榮治郎司教の引退願いを受理された。諏訪司教は1947年7月8日神戸市生まれ、76年11月23日司祭叙階。2011年3月25日司教に任命、同年6月19日司教に叙階された。後任の司教任命はなく、現在空位。同教区は10月3日付で「高松教区の管理者として、駐日ローマ教皇庁大使館はイスマエル・ゴンザレズ神父（前司教総代理）を任命した」と発表した。

人事異動・任命

（　）内は前任地など

▼イエズス会（10月1日付）
関根　悦雄師　東京教区・麹町教会協力司祭（二十六聖人修道院）

2020年
〝被爆75年から
5年間のチャレンジ〟
https://nuclear-free.net/
核なき世界基金

ほしかげ

11月は死者の月、また、一年の典礼暦が終わり、新たに始まる時。待降節からは、新しいミサ典礼文が唱えられる。長年からだに染みついたこれまでの言葉がつい口をついて出てくるのではと案じつつ、当面は信徒も司祭も皆、典礼文をしっかり見ながらということになりそうだ▲戦後の団塊の世代の最後に連なる者の記憶をたどれば、小学生の頃は、ラテン語で背面ミサだった。ある朝、侍者にならないかと大神学生に呼びかけられ、祭壇に憧れていた少年は、父親に頼み込んでようやく許可をもらい、誘ってくれたお兄さんの家に何カ月か通った。侍者になるためには、ラテン語で神父様の受け答えができなければならない。ラテン語をカタカナ読みにして教えてもらい、全部暗記することができると、ようやく侍者としてデビュー▲やがて、中学生の頃からは、今のように祭壇を囲んで行われる対面ミサに変わり、また、日本語のミサになった。この時には非常に大きな変化を感じた。当時は子どもだったのでよく分からなかったのだが、第2バチカン公会議による大幅な刷新の時代だったのだと改めて思い至る▲それからの長い間、日本語のミサ典礼文は、ラテン語規範版の暫定日本語訳だった。このたびのミサ典礼文の変更は、翻訳の見直しを重ねて正式版としてバチカンの承認をようやく得たことによる。関係者の苦労がしのばれる。（秋）

TENREI　Liturgy　TENREI　Liturgy　TENREI

最終回

ミサの式次第の新しい表現⑦

――「先唱者」の場合

日本カトリック典礼委員会　嘉松 宏樹

今年の待降節第1主日から用いられる、新しい「ミサの式次第」。「先唱者」としてミサをささげるにあたっての留意点を、年間主日のミサを想定してご紹介いたします。

会衆の参加するミサでは、司式司祭のほかに祭壇奉仕者（侍者）、朗読奉仕者（朗読者）、そして「先唱者」がいることが望ましいとされています（「ローマ・ミサ典礼書の総則」116。以下、「総則」）。「先唱者」と訳されている「カントール」ということばは「歌い手」といった意味で、本来の役割は、歌い始めることで旋律や歌の速さを示すことにあります。「先唱者」が歌い始める部分を「先唱句」といい、典礼式文の中に明記してある場合もあります。また共同体の習慣として、ある部分を「先唱者」が受け持つこともあるでしょう。

「入祭唱」について、「総則」48は「会衆、または信者のうちの幾人か、あるいは朗読者が朗唱する。そうでなければ司祭自身が唱える」と指示しています。「先唱者」には言及されていませんが、本来、行列を飾る歌である「入祭の歌」の歌い方の一つに、「先唱者」と会衆が交互に歌うかたちがありますので、「入祭唱」を「先唱者」が唱えるのは不自然なことではありません。

「いつくしみの賛歌（キリエ）」は、通常、「先唱者」または聖歌隊に会衆が応唱を唱えるかたちで行われます（「総則」52）。また「栄光の賛歌（グロリア）」は司式司祭以外に、「先唱者」か聖歌隊が歌い始めることもできます（「総則」53）。

「アレルヤ唱（詠唱）」は聖歌隊あるいは「先唱者」が先導し、唱句の部分は聖歌隊あるいは「先唱者」が歌いますが、「先唱者」や聖歌隊がいない場合は一同で歌うこともできます（「総則」62）。

「信仰宣言」を歌う場合は「司祭あるいは適当であれば先唱者か聖歌隊が歌い始める」、歌わない場合は「一同が一緒に、もしくは二つの歌隊に分かれて互いに応唱して唱える」という指示が「総則」68にあります。歌い始めを「先唱者」がつとめる可能性があることから、唱える場合にも司祭あるいは「先唱者」が唱え始めることにとくに妨げはないと思われます。

「共同祈願」の意向は、助祭、「先唱者」、朗読者、または信徒が朗読台か他のふさわしい場所で述べます（「総則」71）。

「感謝の賛歌（サンクトゥス）」は奉献文の一部であり、司祭と会衆がともに歌う賛歌ですから、オルガニストの前奏が示す旋律や速さに合わせて一同で歌うことになります。「総則」には「感謝の賛歌（サンクトゥス）」にかかわる「先唱者」の奉仕について何も触れられていませんが、伴奏がない場合や唱える場合には、旋律や速さを示すために、司祭や「先唱者」が歌い始めたり唱え始めたりすることが想定されます。新しいミサの式次第の式文でどの部分まで先唱するか決まりはありません。ひとつの参考として、オルガンの前奏ならどの部分までかを考えると目安になるでしょう。

「平和の賛歌（アニュス・デイ）」について、「総則」83は、通常、聖歌隊あるいは「先唱者」が「神の小羊」という嘆願を歌うか唱えるとしています。このことから、新しいミサの式次第でも呼びかけである「…神の小羊」までを「先唱者」（あるいは聖歌隊）が唱えるのがよいと考えられます。

「拝領唱」については、「信者によって、または、その幾人かによって、あるいは朗読者によって朗唱することができる。そうでなければ、司祭自身が、拝領してから信者にキリストのからだを授与する前に唱える」（「総則」87）とされています。これも、「拝領の歌」を歌う場合は「聖歌隊だけ、または聖歌隊もしくは先唱者と会衆とによって歌われる」（同）という指示と合わせて考えるなら、「先唱者」が唱えることは問題ないといえるでしょう。

ところで、「先唱者」のもともとの奉仕の一つが旋律を示すことにあったことから考えると、新しいミサの式次第で複数の選択肢がある「記念唱」（聖体聖別直後の、司祭の「信仰の神秘」という呼びかけに対する応唱）と「拝領前の信仰告白」について、どの式文を用いるのかをミサの前に会衆にお知らせするのは「先唱者」の役割といえるかもしれません。司式司祭やオルガニストなど関係する奉仕者とあらかじめ打ち合わせた上で、ミサの前にお知らせするとともに、実際に唱える（歌う）際にも会衆を支えるよう心がけるとよいでしょう。「会衆の歌を指揮し、支え…、会衆の参加を得て種々の歌を指導するのは、先唱者の務め」（「総則」104）だからです。

ミサの式次第の表現は新しくなりますが、ミサは何も変わりません。そこにはいつも救いのわざを続けるキリストがおられます。「あなたがたと共に、この過越の食事をしたいと、私は切に願っていた」（ルカ22・15）と語られるキリストがミサを続けておられます。

新しい「ミサの式次第」学ぶ

現役カテキスタらのための研修会

教区信仰養成部は10月9日（日）13時～16時、カトリックセンターホールを主会場に教区内の小教区や修道会29カ所をオンラインで結び、約580人が参加しての現役カテキスタ研修会を開催した。

今回の研修は講師に嘉松宏樹師（日本カトリック典礼委員会、長崎教区司祭、写真円内）を迎えて行われ、新しい式次第を用いたミサの実施に向けて模擬ミサ形式による説明を聞いた。主会場に祭壇が準備され、「開祭」「ことばの典礼」「感謝の典礼」「閉祭」の4パートに分け、パートごとにまず司祭と参加者が模擬ミサを行った。続いて講師が重要な点について説明し、再度、別の司祭と参加者が模擬ミサを行い、新しい式次第のことば、意味、動作を再確認した。新しい式次第によるミサの実施に向けて有意義な準備となった。

日本の教会では、今年11月27日（待降節第1主日）から一斉に新しい「ミサの式次第」が用いられる。

次に、10班に分かれて最終報告書を読んでの感想や具体的な提案を分かち合った。最後に全体会議を行い、今後の教区シノドス提言の進め方や提言推進会議の在り方に関し、各班からの発表があった。

閉会の前に「新しい『ミサの式次第』に関する長崎教区の共通理解」について教区典礼委員長の下山盛朗師から解説があり、研修会を終了した。

司祭研修会 開催

教区シノドスをテーマに

10月3日（月）、「これからの教区シノドス提言推進の在り方を探る」をテーマに司祭研修会が行われた。今回も新型コロナ感染防止のため、長崎3地区の司祭約50人が集まったカトリックセンターホールをメイン会場に、佐世保・平戸・上五島・下五島地区の4会場をオンラインで結んで開催した。

はじめに中村倫明大司教から、「2023年司教シノドス・長崎大司教区提案」の報告書まとめの協力に対する感謝が伝えられた。また、報告書を実践する上で大切にしなければならないことについて、当日の福音「善きサマリア人のたとえ」を引いて、「あなたが隣人になりなさい」の精神で「こうしなさい」ではなく「私には何ができるか？」、他人事ではなく自分が行っていく、一緒にやっていこうという心構えが大切だと諭し、一人ひとりが決意を持って進もうと励ました。

教区顧問会 開催

審議・報告事項さまざま

2022年度第2回教区顧問会が9月13日（火）、カトリックセンターで開催された。

主な審議事項。教区アカデミー基金特別会計規程の制定が審議され、承認された。また、紐差小教区の司祭館新築工事に関する申請が了承され、加えて宝亀小教区ともども司祭館新築に関する小教区互助基金からの借入申請が了承された。次に、就業規則および関連規則について改正または新設の案が提出され、了承された。留学希望のコレジオ生に関して福岡コレジオの稲田伸也師から説明を受け、留学希望を承認し、教区奨学金として留学費用の貸与を承認した。さらに、ミゼリコルディア長崎の職員採用について福音化推進部長から説明を受け、面接を行うことを承認した。また、10月3日の司祭研修会のプログラムと内容が検討された。

主な報告事項としては聖フランシスコ病院から病院の現状と将来的な展望について報告を受けた。

他にも多数の審議や報告があったが、割愛する。

新刊良書

★前田万葉句集2　雲の峰

著＝前田万葉／訳＝ジェームス・ケティング

カトリック大阪大司教区大司教、枢機卿である著者による第2句集。自註や英訳も併録する。

かまくら春秋社、税込1650円。

短信

〈福者カミロ神父殉教400年記念ミサは中止〉

9月18日（日）開催予定だった日本205福者の一人カミロ・コンスタンツォ神父の殉教400年を記念するミサ（長崎教区主催）が、中止となった。これは、同日から長崎県を暴風域に巻き込んだ台風14号の影響により、安全を考慮しての対応。関係者は「来年あらためて、殉教400周年として開催を目指す」としている。

ぶどう園

▼企画展・長崎の元和の大殉教400周年『信仰のあかし―キリシタンの試練と栄光』開催中

来年1月9日(月)まで（12月31日～1月2日休館）、大浦天主堂キリシタン博物館。入場料は大浦天主堂拝観料に含まれる。

▼世界遺産登録4周年記念シンポジウム『キリシタンと日本』　11月6日(日)13時～17時10分予定、平戸市生月町離島開発総合センター。長崎県、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」保存活用実行委員会主催。入場無料。要予約。

申込先・平戸市生月町博物館（島の館）

TEL 0950-53-3000

FAX 0950-53-3032

▼自死された方々のための追悼ミサ　11月26日(土)14時、西坂・聖フィリッポ教会。ゆりの会主催。教区人権委員会協力。

問合先・鳥巣シオリ

TEL 090-9488-7931

長崎教区の皆様へ

2021年度から行ってきました「コロナ禍支援」は今年12月末で終了させていただきます。皆様からのご支援ありがとうございました。

カトリック長崎大司教区福音化推進部

2022年7月24日カトリックセンターでの記念講演会【2】

「元和の大殉教図」と「元和の大殉教」

長崎純心大学 学長
純心聖母会
Sr.片岡瑠美子

今年9月10日、長崎西坂での「元和（げんな）の大殉教」から400年の節目を迎えた。「元和の大殉教」について皆で学ぶため、長崎教区は7月24日カトリックセンターで記念講演会を開催し、長崎純心大学の片岡瑠美子学長にお話しいただいた。講演の内容を3回に分けてお伝えする連載の2回目。

※大殉教図（複製）は日本二十六聖人記念館に展示されています

Ⅱ　元和の大殉教

ここで少し、日本の歴史に触れておきます。元和（げんな）とは　和暦に使う元号の一つです。西暦1615年～1624年の期間で、後水尾（ごみずのお）天皇の即位に伴い改元され、その頃の江戸幕府将軍は徳川秀忠の時代になります。

(1)大殉教の時代背景

1600年の関ヶ原の役で勝利した徳川家康は、1603年征夷大将軍に任命され、江戸に幕府を開き、江戸幕府を中心とする新しい統治体制の礎を築きました。

ところが家康は1605年には将軍職を辞し、嫡男秀忠に将軍宣下が行われました。このことによって、将軍職は以後徳川氏が世襲していくことを大坂城の豊臣方や天下に示したのです。家康は駿府城に移り、政治に大きな力を示していきました。

1616年、徳川家康が死去すると、2代将軍秀忠は、プロテスタント国（英国国教会）のイギリス商館長コックスを接見し、数日後、幕府は改めてキリシタンの教え（カトリック）を禁じ、明船以外の外国船の長崎・平戸以外の寄港を禁じています。そして、翌年1617年にはイエズス会のマシャド神父とフランシスコ会のペトロ神父が大村の郡（こおり）で斬首されました。大村で最初の殉教でした。大村藩主純頼は、将軍秀忠から潜伏している宣教師の処分を命じられ、弾圧を始めたのでした。キリシタンが多かった大村には禁教令が出された後、宣教師38人が潜伏していたといわれています。その他、大村藩では1624年にはフランシスコ会のルイス・ソテロ神父ら5人が放虎原で火刑になりますが、1658年の「郡崩れ」では、131人が処刑されました。

話を戻しますが、1619年に長崎でキリシタン訴人に賞金を与える高札が立てられると、密告による逮捕が多くなり、大殉教を引き起こしました。

徳川秀吉の時代、1619年10月6日京都で52名の殉教（京都の大殉教）、1622年9月10日長崎で55名の殉教（元和の大殉教）、1623年7月徳川秀忠が将軍職を辞し、徳川家光が3代将軍となった直後の1623年12月4日、江戸で50名が殉教（江戸の大殉教）と、大殉教が続きました。

教皇ピオ9世は、再布教が始まろうとしている日本の教会を励ますために、1862年6月8日、ローマで日本二十六殉教者を列聖しましたが、1867年7月7日には205名の殉教者を列福し、「日本205福者殉教者」と命名しました。一方、同月15日には、長崎の浦上村で68名のキリシタンが捕縛され、明治政府による信仰弾圧「浦上四番崩れ」が始まりました。

(2)元和の大殉教とは

元和の時代は、西暦1615年～1624年の期間で、この時代の天皇は後水尾天皇、江戸幕府将軍は徳川秀忠、家光の時代です。26聖人の殉教から25年後、1622年9月10日に同じ長崎の西坂の丘で同時に55名の処刑が行われた出来事を「元和の大殉教」と呼んでいます。

火刑25名　大村牢（鈴田牢）に入牢していた司祭・修道士・宿主たち

斬首30名　長崎牢（クルス町牢、桜町牢）に入牢していた信徒、男女および子どもたち

ベント・フェルナンデスは、「火刑24名、斬首31名と記しています」。

1867年7月7日、教皇ピオ9世はローマで日本205福者殉教者を列福しました。日本205福者殉教者は、1617年5月に大村領郡で斬首されたイエズス会マシャド神父とフランシスコ会ペトロ神父、同年6月に鷹島で斬首されたドミニコ会ナワレット神父とアウグスチノ会エルナンド神父の4修道会4司祭の殉教から始まり、1632年9月3日西坂で火刑となったアウグスチノ会のグティエレス神父までの205名の殉教者です。

その中で、1622年9月10日（元和8年8月5日）、西坂の丘で火刑と斬首の刑で処刑された55名の殉教者たちを元和の殉教者と呼んでいます。

(3)キリストのための囚人

宣教師たちのための鈴田牢

大村の鈴田牢は宣教師用に造られたもので、司祭と修道者、彼ら宣教師に宿を提供してかくまい、密かに潜伏活動を支援していた宿主たちでした。火刑に処せられたのは、この鈴田牢の入牢者たちでした。新牢は1619年から1622年まで使用されました。

イエズス会のカルロ・スピノラは、「逮捕は1618年12月14日になる前の真夜中過ぎに起こりました。1619年7月末まで一軒の麦わら小屋に伴侶らと共に入れられていました。…8月9日、私たちは以前よりもっと狭い、長さ24パルモ、幅16パルモで鳥籠のように太い四角の材木で新しく造られたこの牢に入れられました。…柱の間は指2本の間隔でした」「この狭い所に囚人は16人から20人になり、後に33人にもなり、夜は横になって寝ることさえできなかった。牢舎の周囲は茨をいっぱい植え込んだ二重の柵に囲まれていました」と鳥籠のようだという牢の見取り図を添えて説明し、パジェスは、「広さは、蓆（むしろ）12枚敷きに過ぎなかった。そこに30名、時にはそれ以上の人数がいたので、3名で一枚の蓆を使っていた。彼らはこの牢内に昼夜幽閉され、足の踏み場もないほどであった。厠（かわや）もこの中にあり…毎日の食事の量は…一椀の玄米の飯と焼きイワシで、時々大根の葉の汁を添えたものであった」と記しています。

『スピノラ伝』によると、1622年8月には、「食料不足とその不味さ、その他の不自由さ、および昨年の11月からこの牢には23名が閉じ込められており、その狭隘（きょうあい）さのために、多くの者が死に至るほどの重病に陥りました。…しかし薬もよい食物もないのに、牢屋の通常の食事だけで健康を回復しました。それでも骨と皮だけで、今日までめまいなしには少しの間も立っていることはできません。全員を生き永らえさせ、共に犠牲をささげさせようとされる主は誉め讃えられますように」と記されています。

カルロ・スピノラ神父は自筆の手紙を「信仰のための囚われ人 カルロ」の署名で結んでいます。『スピノラ伝』の著者は「彼は投獄されたことがいかに名誉であったかを示すためだけに、（著名な貴族である）スピノラ姓を棄て、常に「囚われ人のカルロ」あるいは「キリストのための囚われ人」（スピノラ伝）と署名していたと証言しています。また、8月26日付で管区長に書いた手紙は、「ジェズの御名のために死刑に定められたカルロス」と、最後となる手紙を締めくくっています。

毎日ささげられるミサ

「祝日を除いて聖なる共同体の伴侶たちは全員苦行を行った。各自1週間交代で上長となり、以下の順序に従って行うべき霊操の計画を立てた。朝は1時間沈黙のうちに祈りを唱え、その後司祭全員でミサを立てる。朝食までの残りの時間は聖務日課、ロザリオを唱え、霊的書物を読んで過ごしていました」

「私たちは日夜鞭打ち、苦行帯その他の苦行を行いながら、種々の霊操を続けています。最大の慰めは毎日ミサを挙げることができることです。祭服その他の必要な用具がひそかに牢内に入ることができたのは、主の特別なお恵みでした」

「私たちは、日々さまざまな修練に明け暮れ、時々詩編を歌い、祝日でない日には苦行を行い、私たちが得ることのできる最大の慰めである天使のパンによって養われています。…この聖なるパンは肉体的にも霊的にも私たちに力を与えてくれます」と、カルロ神父は1620年2月16日付で総長に書き送っています。

このようにミサが行われたのは、葡萄酒、パン、ローソクなどを、逮捕も覚悟の上、むしろ宣教師たちと共に殉教できることを望んで、密かに牢に差し入れるキリシタンたちがいたからだということを私たちは忘れてはならないと思います。

(4)凱旋の日

1622年9月10日（元和8年8月5日）、この日、西坂の丘を目指す二つの行列がありました。

大村の鈴田から西坂を目指す行列と、長崎のクルス町牢から進む行列が、西坂の丘で合流します。

鈴田から西坂へ

鈴田牢の囚人たちは手足を縄で縛り上げられ、牢から引き出されました。「全員一艘の大きな船に乗せられ、その周りを多数の兵士たちが水も漏らさぬように取り囲んだ」

ベントの記述によると、「鈴田から長与港まで船で、そこから浦上と長崎の境にあった宿まで馬で進み、そこで最後の夜を過ごした」のですが、「露天にさらされていたが、突然大雨が降って来たために、きつく縛られて一軒の荒屋に押し込められ、その夜を明かした」だけでした。そこで初めてカルロ・スピノラは火あぶりにされるという確かな知らせを受けたと『スピノラ伝』に書かれています。

貧しい朝食をとった後、キリシタンたちが彼らと言葉を交わすことができないように、「前日と同じように馬に乗せられ、時津街道を通って西坂まで行った」となっています。馬に乗せられたのは、殉教者に会いたいと集まるキリシタンたちを近づけないためでした。

パジェスは、1621年の章で、「1597年の殉教によって祝聖された場所には、桜の木が植えられ、記念の石が建てられていた。権六は、木を抜き、石を散らばした。彼は同所に偶像の寺を建てさせ、直ちに柵をめぐらした」と述べています。

更に、1622年の章では、処刑に「選ばれた場所は、1597年の殉教があった場所から150歩の所にあった」（パジェス）と記しています。このパジェスの記述と「元和の大殉教図」を照合してみると、図では、処刑を見守る人々の背後に柵で囲まれ、周辺に木が植えられている広場があり、処刑の場所と分けて描写されていて、パジェスの記述と一致して見えます。

他方、『スピノラ伝』では、「柵で囲まれた刑場 1597年、磔にされ、諸殉教者の血をもって清められたがために、聖地と呼ばれている処刑場へ」赴いたと記されています。

彼らは早く着いたので、皆、一緒になってこのパライソの群れのために準備された竹矢来に入らず、町からの仲間を1時間以上待っていました。「矢来の前に集まった大村の殉教者たちは、長崎の殉教者の到着まで1時間の間待った。（彼らは砂時計を持っていた）互いに告解し、賛美歌を歌った。スピノラ師は、堂々たる演説をした」

「その時間と場所には至福なる殉教者に別れを告げるために大勢が集まり、一人の信心深い婦人は、見張りの番人にかまわず勇気をもって殉教者を囲んでいた槍と武具の間をぬって彼らに近づき、涙を流しながら茶か湯を飲ませた」ことを目撃したとベント・フェルナンデスは記しています。

処刑場では殉教者の目前に25本の柱が立っていて、犠牲の時燃やされる薪がすでに積み上げられていました。

（つづく）

主な史料

① 結城了悟著『長崎の元和大殉教 1622年 ベント・フェルナンデス神父による記録』。
② イエズス会「（1622年の）日本殉教報告」1623年8月16日付、マニラ発。
③ レオン・パジェス著／吉田小五郎訳『日本切支丹宗門史』中巻、岩波書店 1938年。
④ ファービオ・アンブロージオ・スピノラ著／宮崎賢太郎訳『カルロ・スピノラ伝』キリシタン文化研究シリーズ28、キリシタン文化研究会 1985年。
⑤ セ・デルガード・ガルシア編注／佐久間正訳『福者フランシスコ・モラーレスO.P.書簡・報告』キリシタン文化研究会 1972年。

丸尾教会 献堂50周年

記念ミサと境内の祝別

1972年9月22日、里脇浅次郎枢機卿によって祝別された丸尾教会で、2022年9月23日、中村倫明大司教を迎え、献堂50周年記念ミサが行われた。大司教を待つ信者たちは、一人ひとり一輪の花を手にして、また、50周年を記念して作ったオリジナルポロシャツを着て大司教を迎えた。

記念ミサは、中村大司教をはじめ、歴代の主任司祭、郷土出身司祭、上五島地区の司祭、ならびに数多くの信者と共に盛大に祝われた。大司教は説教の中でそのポロシャツをほめ、丸尾教会の一致した信仰の現れとたくましさをたたえた。そして、丸尾教会出身の野中 泉神父を紹介しながら召命の必要性について語り、また、自身の胸に下げている復活のキリストの十字架を見せて、苦しみの中にも強い信仰を持ち、信仰に生きた元和の殉教者を例にあげ、「しっかりとした信仰を守り、生きてください」と信徒を励ました。

ミサの後、50周年を記念し新しく整備した境内が祝別され、感謝と喜びのうちに無事に式典を終えた。

（丸尾小教区）

「マリア館」落成・祝福式

さくらの里聖家族教会 納骨堂

9月11日、さくらの里聖家族教会（滑石小教区）境内地に待望の納骨堂「マリア館」が完成し、中村倫明大司教に祝福していただき、たくさんの参列者と一緒に喜びを分かち合った。

この納骨堂は、滑石教会に納骨櫃の空きがないか、滑石小教区や外海地区からの問い合わせが増えたことで、その要望に応えたもの。建物は鉄筋コンクリート造りでバリアフリー、床面積144㎡内に152基の納骨櫃を備え、上下段合わせて7寸サイズの骨壺が8～10体収納できるようになっている。材質はさくらの里教会にちなんで桜御影石を使用し、明るく仕上がっている。

1櫃60万円で、50年の管理費を10万円（滑石小教区信徒は免除）に設定している。購入希望者は問い合わせください。納骨堂建設にあたり、十字架の道行も整備した。

（滑石小教区）

感謝

―寄付―

長崎大司教区
●堤家様

―香典返し―

長崎大司教区
●レデンプトリスチン長崎修道院様

長崎カトリック神学院
●小田れい子様（奈留）
故ペトロ小田俊則様

右の方々からご寄付・ご芳志を賜りました。お礼とご報告を申し上げます。

青年のためにお祈りください

第3回長崎青年の日
―ともに―
11/3㊍カトリックセンター

みことばにふれて 195

大山 繁 神父
（長崎教区信仰教育委員会、平戸口教会）

「人の子は、父の栄光に輝いて天使たちと共に来るが、そのとき、それぞれの行いに応じて報いるのである」（マタイ16・27）

私は、多くの人の祈りに支えられて、50年間司祭生活を続けることができました。皆さんのお祈りとご援助に感謝申し上げます。助祭の位を受ける時、司教様は式文の中で、「みことばをよく読んで理解し、理解したことを教え、教えたことを実行するようにしなさい」と言ってくださいました。平戸口教会で主任司祭をしている私の主な仕事は、毎朝聖書を読み、理解できたことを朝のミサの中で短く語り、ミサにあずかる信者たちが聖書のみことばを心に留めおけるように手助けすることです。

私たち一人ひとりは、自分に与えられている生涯を終わり、御父の裁きを受けます。その時、私が司祭であったということは問題にされません。問題になるのは、司祭としてどのように振る舞ったかです。司祭の仕事は、秘跡を授けること、イエス様の十字架の死と死者の中からの復活を宣言し伝えること、人の苦しみや悩みを聞き、共に祈り励ますことなどたくさんあります。主イエス様は、私をお裁きになる時に、司祭にふさわしい態度で人々に接することができたかを評価してくださいます。

一人ひとりには幸せに生きるためにいろいろな役割があります。役割を行う者として、社会では肩書きがあります。そして、それぞれに任されている仕事の結果によって評価されます。

しかし、神様の裁きは違います。神様は私たち一人ひとりに与えられた役目を、どのように行ったかを評価してくださいます。

司祭としての生活が50年、残されている時間は多くはないでしょう。年上の人に会う時に、今からが勝負ですと伝えています。自分の思う通りに体が動かなくなって不自由を感じる時、忍耐とささげる心が大切になってくるからです。

ペトロ カン・ギルジュさん

（カン・デフン師（韓国殉教福者聖職修道会司祭）の父）

8月30日、膵臓（すいぞう）がんのため逝去。78歳。

1944年韓国の済州島出身。86年受洗。公務員だった故人は小教区で壮年会の役員を長きにわたって担い、活動した。2男1女の父親であり、次男デフンが韓国殉教福者聖職修道会に入会し、神父となって長崎に協力司祭として派遣されてからは、常に祈りをささげ応援してきた。

3年前に膵臓がんで手術を受け、故郷に帰って療養しながら、済州教区ファスン教会のヨゼフ会という老人会で活動した。故人をよく知る人は「優しい人だった」と話し、特に同教会の主任神父は、「いつも笑顔で信仰生活を送り、葬儀の時もその笑顔が思い出された」と信徒に語っていた。毎朝、「私は主のはしためです。お言葉通りになりますように」という聖母マリアの祈りで一日を始めていたという。

葬儀ミサは9月1日、ファスン教会で行われた。

マリー・インマクラタ 佐藤佐知子修道女

（厳律至聖贖罪主修道女会）

9月7日逝去。90歳。

1932年東京生まれ。鎌倉修道院に入会。その後、長崎へ。60年初誓願、66年終生誓願宣立。外務修道女として幼稚園で勤めた。語学研修のためカナダで2年ほど学び、外国からの訪問者の接待に奉仕した。76年、創立のためカナダの修道院に異動。日本に帰国し、長崎修道院に戻る。高齢になり長崎市内の介護施設に入居し、体の不調を静かにささげていた。次第に衰弱し、誤嚥（ごえん）性肺炎のため、静かに主のみもとに召された。修道生活62年。

葬儀ミサ・告別式は9月10日、レデンプトリスチン長崎修道院で行われた。

ウルスラ 糸永ヨシ修道女

（純心聖母会）

9月27日、老衰のため逝去。98歳。

1923年平戸市紐差生まれ。46年初誓願、55年終生誓願。原爆を体験し、被爆した生徒たちを探すために奮闘、学園長の片腕となって灰じんの中から学園復興のため全力を尽くした。修練長を務め会員の養成に携わり、多くの会員を育てた。また純心学園や社会福祉の理事長などを兼務し、修道会においては総顧問（会長補佐）として業務に携わり、会の記録作成のために大きな役割を果たした。恩人や卒業生とも広く交流があり、その温かい人柄は多くの方に慕われた。2009年にはすべての任務から解放され、修道院内で姉妹と共に穏やかな生活を過ごした。20年、療養のためロザリオの聖母修道院へ。ベッドの上での祈りから始まり、祈りで終わる生活を続け、黙々と自分にできる奉仕にも励んでいた。

マリア・ヴィアンネ 西山シズノ修道女

（純心聖母会）

10月1日逝去。88歳。

1934年福岡県直方市生まれ。24歳で受洗し、友人である本会の姉妹を通して31歳で入会。67年初誓願、77年終生誓願。洋裁師であった経験から学園の制服作りに携わり、会と学園を支えた。73年から41年間、社会福祉一筋で4つの事業所に奉仕。特に95年から軽費老人ホーム「ときわ荘」において19年間施設長として奉仕し、建築や庭づくりなどに励んだ。神学生やミサに来られる司祭を大切にし、教会のためにと寛大に支え続けた。2014年鹿児島川内に派遣されたが、肺がんが見つかり、20年に治療のため長崎の浦上修道院へ。病苦をささげながらも一時は快方に向かったが、がんが進行し、今年8月、症状が悪化しホスピス療養となった。修道院に帰りたいとの願いはかなわず、姉妹の見守りの中で静かに御父のみもとに旅立った。

カリス通信 11月号
学校に関わるリスクのご紹介

昨今、学校に関わるリスクは複雑化しています。施設に起因するリスクに加え、いじめ、試験の採点ミス、職員のハラスメントなどリスクは多岐にわたります。今回は、学校に関わるリスクと対応する保険をご紹介します。

＜学校教育活動賠償責任保険＞
学校教育活動の遂行またはハラスメント等の行為に起因して、学校が法律上の損害賠償責任を負担することによって被る損害に対して保険金をお支払いします。

＜学校教育活動に関する事故事例＞
- 学校が生徒間のいじめを把握できず、いじめられた生徒から精神的苦痛を受けたとして損害賠償請求があった。
- 卒業試験の採点ミスで留年となったことにより、保護者から損害賠償請求があった。
- 部活動の顧問からハラスメントにより精神的苦痛を受けたとして、学生とその保護者から損害賠償請求をされた。

カリスでは、学校に関わるリスクと保険についてご案内をしています。どうぞお気軽にカリスまでご相談ください。

私たちが、お守りします。
三條貴英　毛利玲子　山本泰彦
服部秀昭　川口 薫神父（顧問）

※本ご案内は「学校教育活動賠償責任保険」についてご紹介したものです。ご契約にあたっては「重要事項説明書」をご一読ください。

カトリック共済システム 有限会社カリス
〒135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10 日本カトリック会館
連絡先 0120-77-0033
カトリック共済システム 検索　22-TC05211
引受保険会社：東京海上日動火災保険株式会社
リスク・補償に関してお気軽にお問い合わせください

空き家を減らし、街の灯を灯す
行政書士
ヨゼフ 鼻崎 貴広
宅地建物取引士
管理業務主任者
賃貸不動産経営管理士

浜電気グループ　はなさき貴広事務所
〒850-0853 長崎市浜町2番7号 TEL:095-827-8400/FAX:095-824-4150

タンスの中身は入れたまま
責任ある安全運送!!
（見積り無料・荷造り発送も致します）
貨物保険有り
・一般引越　・小荷物
・荒ゴミ捨て　・遠距離
・学生引越

24時間営業・年中無休
受付時間 7：00～22：00
水浦運送
シモン 水浦 幹雄
長崎市上野町12－3
TEL(095)㈹847－7151
携帯 090－7923－9005